

海潮音

海

潮

音

上

田

敏

譯

明治三十八年十月十日印刷 海潮音奥付

明治三十八年十月十三日發行

定價金壹圓

譯者 上田 敏

發行者 東京市本郷區駒込東片町廿六番地 吉田 正太郎

印刷人 東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地 今井 鐵次郎

印刷所 東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地 今井 活版所

發行所 東京市本郷區駒込東片町廿六番地 本郷 書院

賣捌

東京堂、上田屋、前川文榮閣、林平次郎、東海堂、北隆館、良明堂、大阪吉岡、杉本書店、久留米菊本、名古屋屋川瀨、星野文星堂、其他各書林



序

卷中收むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロヴンスに一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し、曩の高踏派と今の象徵派とに屬する者其大部を占む。

高踏派の莊麗體を譯すに當りて、多く所謂七

五調を基としたる詩形を用ゐ、象徵派の幽婉體を翻するに多少の變格を敢てしたるは、其各の原調に適合せしめむが爲なり。

詩に象徵を用ゐること、必らずしも近代の創意に非らず、これ或は山嶽と共に舊るきものならむ。然れども之を作詩の中心とし本義として故らに標榜する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭

西新詩を以て嚆矢とす。近代の佛詩は高踏派の名篇に於て發展の極に達し、彫心鏤骨の技巧實に燦爛の美を恣にす、今茲に一轉機を生ぜずむばあらざるなり。マラルメ、エルレエヌの名家之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を説けり。譯者は今の日本詩壇に對て、専ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の

然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオバチルの詩に注げり。然れども又徒らに晦澁と奇怪と以て象徵派を攻むる者に同せず。幽婉奇聳の新聲、今人胸奥の絃に觸るゝにあらずや。坦々たる古道の盡くるあたり、荆棘路を塞ぎたる原野に對て、之が開拓を勤むる勇猛の徒を貶す者は怯に非

らずむば情なり。

譯者嘗て十年の昔、白耳義文學を紹介し、稍後
れて、佛蘭西詩壇の新聲、特にヱルレエヌ、ヱルハ
アレシ、ロオデンバツハ、マラルメの事を説きし
時、如上文人の作なほ未だ西歐の評壇に於ても
今日の聲譽を博する事能はざりしが、爾來世運
の轉移と共に清新の詩文を解する者、漸く數を

増し勢を加へ、マアテルリンクの如きは、全歐思想界の一方に覇を稱するに至れり。人心觀想の默移實に驚くべき哉。近體新聲の耳目に嫻はざるを以て、倉皇視聽を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徙りぬ、心せよ。

日本詩壇に於ける象徵詩の傳來、日なほ淺く、作未だ多からざるに當て、既に早く評壇の一隅

に囁々の語を爲す者ありと聞く。象徵派の詩人
を目して徒らに神經の銳きに傲る者なりと非
議する評家よ、卿等の神經こそ寧ろ過敏の徵候
を呈したらずや。未だ新聲の美を味ひ功を收め
ざるに先ちて、早く其弊竇に戰慄するものは誰
ぞ、

歐洲の評壇亦今に保守の論を唱ふる者無き

にあらず。佛蘭西のブリュンチエル等の如きこれなり。譯者は藝術に對する態度と趣味とに於て、此偏想家と頗る説を異にしたれば、其云ふ所に一々首肯する能はざれど、佛蘭西詩壇一部の極端派を制馭する消極の評論としては、稍耳を傾く可きもの無しとせざるなり。而してヤスナヤ・ポリヤナの老伯が近代文明呪咀の聲として、

其一端をかの「藝術論」に露はしたるに至りては、全く賛同の意を呈する能はざるなり。トルストイ伯の人格は譯者の欽仰措かざる者なりと雖、其人生觀に就ては、根本に於て既に譯者と見を異にす。抑も伯が藝術論はかの世界觀の一片に過ぎず。近代新聲の評隲に就て、非常なる見解の相違ある素より怪む可きにあらず。日本の評家

等が僅に「藝術論」の一部を抽讀して、象徵派の貶斥に一大聲援を得たる如き心地あるは、毫も清新體の詩人に打撃を與ふる能はざるのみか、却て老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生觀の根本問題に於て、伯と説を異にしながら、其論理上必須の結果たる藝術觀のみに就て賛意を表さむと試むるも難い哉。

象徴の用は、之が助を藉りて詩人の觀想に類
似したる一の心狀を讀者に與ふるに在りて、必
らずしも同一の概念を傳へむと勉むるにあら
ず。されば靜に象徴詩を味ふ者は、自己の感興に
應じて、詩人も未だ説き及ばざる言語道斷の
妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に對する解
釋は人各或は見を異にすべく、要は只類似の心

狀を喚起するに在りとす。例へば本書一五九頁
 「鷺の歌」を誦するに當て讀者は種々の解釋を試
 むべき自由を有す。此詩を廣く人生に擬して解
 せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法^パ利^リ賽^{サイ}の徒と
 共に虚偽の生を營みて、醜辱汚穢の沼に綱うつ、
 名や財や、はた樂欲を漁らむとすなり。唯、縹緲た
 る理想の白鷺は羽風徐に羽撃きて、久方の天に

飛び、影は落ちて、骨蓬の白く清らにも漂ふ水の
面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のも
のならざればなりと。されどこれ只一の解釋た
るに過ぎず、或は意を狭くして詩に一身の運を
寄するも可ならむ。肉體の欲に饜きて、とこしへ
に精神の愛に飢ゑたる放縱生活の悲愁こゝに
湛へられ、或は空想の泡沫に歸するを哀みて、眞

理の捉へ難きに懂がるゝ哲人の愁思もほのめ
かさる。而して、此詩の喚起する心狀に至りては
皆相似たり。二〇二頁「花冠」は詩人が黄昏の途上
に佇みて、「活動」、「樂欲」、「驕慢」の邦に漂遊して、今や
歸り來れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等
默然として頭俛れ、齎らす所只幻惑の悲音のみ。
孤り、此等の姉妹と道を異にしたるか、終に歸り